

教育現場で使いやすい「対話型美術鑑賞」の新規プログラムの開発 成果報告書

会津大学短期大学部 幼児教育・福祉学科

専任講師 高田 正哉

1. 本事業の概要

本事業は、喜多方市における「対話型美術鑑賞」(visual thinking strategy)の普及について、喜多方市教育委員会文化課と連携し、新規プログラムを作成したものである。喜多方市では、2022年度より、「対話型美術鑑賞」のプログラムの普及を目指している。2024年度現在、「対話型美術鑑賞」は喜多方市内でも認知されているものの、学校教育等の教育実践において導入されている事例は、目標よりも少ないことが現状である。本研究では、喜多方市内の小学校、中学校、高等学校等で「対話型美術鑑賞」が普及されるよう、その価値や新しいプログラムを作成し、教育実践で活用されることが目指されている。

2. 本事業の経過

本事業では、喜多方市教育委員会文化課の文化芸術専門官の石田俊輔氏と協働し、新規プログラムの作成を行った。7月より石田氏と協議し、新規プログラムの立案、計画を行った。その後、立案した新規プログラムをもとに、24年度「基礎演習Ⅱ(高田)」の受講生である学生5名が「対話型美術鑑賞」および新規プログラムの活動に参加した。そこで、参加者の体験や考えを聞き、新規プログラムの作成を修正・改善を行った。

また、「対話型美術鑑賞」および本事業「教育現場で使いやすい『対話型美術鑑賞』の新規プログラムの開発」が喜多方市内で認知されるようにするため、「対話の文化を創る～対話型鑑賞の可能性を探究する!」というイベントを実施した。本イベントでは、東海大学特任助教の西本健吾氏、フリーランスの編集者である瀬下翔太氏を登壇者として招待し、「対話型美術鑑賞」における重要な要素である「対話」の意味を、登壇者および石田氏とで、「対話型美術鑑賞」への体験、およびパネルディスカッションから考察した。加えて、登壇者の西本氏と瀬下氏とで新規プログラムを別の機会で見いただき、修正・改善へのコメントを頂戴した。

以上の事業を展開することで、喜多方市の「対話型美術鑑賞」の普及がさらに進むように展開しているところである。以上の成果を踏まえて、本事業では「対話型鑑賞と鑑賞を活用した

学習プログラムのカタログ」(別紙1)を作成することができた。今後、このカタログを喜多方市内の小学校、中学校、高等学校および福島県内の高等学校等で配布し、喜多方市の対話型美術鑑賞の普及を目指す。

3. 今後の展望

本事業では、「対話型鑑賞と鑑賞を活用した学習プログラムのカタログ」を作成し、喜多方市内および福島県内の学校等で「対話型美術鑑賞」の普及が目指される。今後は、喜多方市内で「対話型美術鑑賞」が普及し、「Update Local」の標語のもと、喜多方市内で対話的な学びが普及し、一つのシビックプライドとして定着していくことが目指されるであろう。加えて、喜多方市立美術館等で、「対話型美術鑑賞」がより日常的に行われ、「対話の場」、「会話の場」という公共空間（public space）として再定義されることで、喜多方市でアートを中心とした若者や高齢者等が集う公共空間が創出されることも期待される。そのような「公共」が、アートによって創造されることが、本事業の最終的な到達地点であると、喜多方市教育委員会や喜多方市の市民に共有されるよう、今後の展開に期待したい。